

月経困難症と低用量ピル

○月経困難症とは・・・

月経困難症とは、月経に随伴して起こる病的な症状であり、主に下腹部痛、腰痛、頭痛、抑うつなどの症状があります。機能性のものと器質性のものに分類され、機能性月経困難症は子宮や卵巣に異常がなく、主に局所で発生・作用するプロスタグランジンがその原因の一つと考えられています。

痛みの程度や痛みの感じ方には個人差があり、生理痛が全くない人もいれば、生理痛がひどく寝込んでしまい学校や仕事に行けなくなってしまうなど、さまざまです。また、痛みだけではなく、不安、抑うつ、いらいらなど精神的な症状があらわれることもあります。

月経困難症に対する治療薬としては、痛み止めや漢方薬、ピルなどが挙げられます。その中で今回は低用量ピルについてご説明します。

○月経困難症に対する低用量ピル

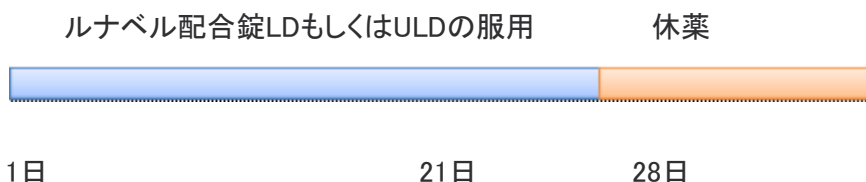
低用量ピルは避妊を目的として開発されたエストロゲンとプロゲステロンの配合薬です。排卵を抑制し、子宮内膜の増殖を抑制する効果があります。子宮内膜の増殖が抑制されることで月経血量が減少し、また子宮内膜からつくられるプロスタグランジンの産生も抑えられ、月経困難が緩和されます。

日本において機能性月経困難症に対し保険適応となっている低用量ピルは3種類あり、ルナベル配合錠LD、ルナベル配合錠ULD、およびヤーズ配合錠です。それぞれについてご説明します。

<ルナベル配合錠LD／ルナベル配合錠ULD>

ルナベル配合錠LDはエチニルエストラダイオール0.035mgとノルエチステロン1.0mgからなる一相性のピルで、2010年より機能性月経困難症に保険適応となりました。1日1錠を21日間連続服用し、7日間の休薬をにおいて、28日を1周期として継続します。継続的に服用することにより、1周期目より月経困難症状が徐々に改善し、投与期間中はその効果が持続します。副作用として、不正性器出血や悪心、頭痛などがありますが、服用期間が長くなるにつれその頻度は低下し軽快することが多いです。

ルナベル配合錠ULDは、ルナベル配合錠LDのエストロゲン成分であるエチニルエストラダイオールが0.020mgに減量された超低用量の配合剤として2013年に販売になりました。ルナベル配合錠LDと比べ、副作用である悪心、頭痛が軽減されましたが、不正性器出血の頻度が少し高いと報告されています。不正出血の副作用がひどければ、ルナベル配合錠LDへの変更を考えてください。



<ヤーズ配合錠>

ヤーズ配合錠は、エチニルエストラダイオール0.020mgとドロスピレノン3.0mgからなる製剤であり、エストロゲン成分はルナベル配合錠ULDと同量の超低用量のピルです。1日1錠を24日間連続服用し、4日間プラセボを服用する、28日1シートの製剤となっています。プロゲステロン製剤がルナベル配合錠ULDと異なっており、むくみや体重増加等の副作用が比較的少ないのが特徴です。

ヤーズ配合錠の服用

プラセボ服用



○低用量ピルの副作用～血栓塞栓症について～

重い副作用として血栓塞栓症があります。喫煙者、肥満、高血圧、血栓症の素因のある方の服用には注意が必要です。発生の前兆として、腹痛、胸痛、突然の息切れ、激しい頭痛、視力・構音障害、意識障害、下肢痛・下肢のむくみなどがあり、このような症状を認めた場合には早急な対応が必要です。総合的な診療ができる病院への受診が必要となります。血栓塞栓症の発症率は約0.02～0.03%と報告されており、服用開始4か月以内にみられることが多いと報告されています。

○おわりに

月経困難症の治療薬として、低用量ピルは非常に有効であり、女性のQOLの向上のためにも必要なお薬です。定期的な産婦人科の診察を受けながら、安全に服用しましょう。(熊澤由紀代 記)